

2022年5月15日 主日礼拝

説教題「事実、それは神の言葉であり」

第一テサロニケ 1 章 2～7 節、2 章 13 節

主任牧師 加藤 誠

「なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです」(第一テサロニケ2章13節)

使徒パウロの手紙には、宛先の教会の人たちとパウロとのその時の関係のあり様がそれぞれ映し出されていますが、『テサロニケの信徒への手紙一』には明るさと喜び、感謝がにじみでていて、両者が喜びの関係にあったことが伝わってきます。パウロがテサロニケの人たちを心配して祈っていると同様に、テサロニケの人たちもパウロを案じていて、パウロ自身がテサロニケの人たちの信仰と祈りに大いに励まされている姿が浮かび上がってくるのです。例えば、冒頭の 1 章 2 節以降には、テサロニケの人びとが「信仰と愛と希望」に生かされている様子を喜びをもらっているパウロが浮かび上がってきます。

パウロのテサロニケ伝道は激しい反発と暴動にあい、成功とは言えませんでした。パウロがわずか三週間で、逃げ出すようにベレアという町に行きますと、そこにも反対者たちが押し寄せて騒ぎを起こしています。テサロニケの反対者たちは実に執拗で暴力的な人たちでした。彼らはパウロの教えを聞いてクリスチャンになった人たちにも圧力をかけ、パウロをかくまったヤソンを町の当局者の突き出しています。そのようにクリスチャンにとって手ごわい迫害者が大勢がいるテサロニケの町で、パウロから神の言葉を聞いて信じた、ほんの一握りの人たちによって小さな教会が生まれたのでした。パウロはこのテサロニケ教会のことが心配でしかなかったのでしょう。弟子のテモテを派遣して様子を見に行かせ、この手紙を書いたのです。

先週の水曜日、朝の祈禱会では「キリストの再臨」についてパウロが熱く語っている四章を読んだのですが、ある方が「パウロの手紙を読んでいると、わたしもイエス様に会いたくなってくる」と、うれしそうに語っておられました。パウロは「主イエスの再臨」を確信していて、「私たちも生きたまま空中に引き上げられて、主イエスと先に眠りについた人たちと再会することになるのだ！」と、まるでその情景がリアルに見えるように語るのです。現代人の私たちにはどこか荒唐無稽に思えますが、パウロにとって復活の主との再会はリアルな確信でした。

パウロの伝道活動は、文字通り気の休まることのない苦難の毎日でした。伝道に出かけていく先々で激しい反発を受け、十数年の伝道活動の三分の一を、パウロは獄中で過ごしています。それにもかかわらず、パウロの中には主イエスがリアルに生きていました。それはパウロ自身が復活の主イエスの働きを日々体験していたからでしょう。パウロにとって復活の主は十字架の主であり、その十字架の主が、コ

テコテのユダヤ教律法主義者であるパウロを打ち砕き、「怒りの器」であった彼を「憐みの器」に造り変えてくださったのでした。

「事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです」(2・13)。ここでパウロが「神の言葉」と言っているのは「十字架の主イエス」のことです。私たちは、実際には神の言葉を、人の言葉を聞くように耳で聞きとることはできません。たまに「わたしは神の声を聞いた」という人がおられますけれども、その声を絶対化することはできません。人間は自分に都合よく神の言葉をつくりだしてしまうこともあるからです。けれども、聖書が証している確かな「神の言葉」があります。それは「十字架の主イエス」です。十字架において、私たち人間の罪をすべて受けられた方。この「十字架の主イエス」こそが、私たちが心をしっかり向けて聞くべき「神の言葉」です。福音書の中で、「これはわたしの愛する子、これに聞け」という声が天から響くときに、「これに聞け」と言われているのは「十字架に向かって歩み、わたしたちのために十字架を背負い、十字架で苦しみをすべて受け尽くされた主イエス」です。私たちの間で確かな「神の言葉」。それはこの「十字架の主イエス」なのです。この方に「神の御心、神の語り掛け、神の祈り」を聴いていく。パウロに反対する人びとは「十字架につけられるような男が神の子であるわけがない！」と猛反発しましたがけれども、パウロは「十字架の主こそ、私たちを救う方メシアである」と確信し、譲りませんでした。

私たちが生きている世界は暗澹たる闇に覆われています。ウクライナ、ミャンマー、沖縄…。あらゆる場所で「どうして、こんなことが！」という悲しい現実があふれています。今日5月15日は沖縄「復帰」50年の日です。先日、沖縄のクリスチャンの集まりで、50年前に当時の沖縄の屋良主席が沖縄の人々の声を取りまとめて日本政府に提出した「復帰措置に関する建議書」を直接読む機会がありました。そこには「悲酸な沖縄戦を体験した者として、私たちは戦争につながる一切のものを否定する」という言葉と共に、「地方自治権の確立」「基本的人権の確立」「基地のない平和の島の実現」という願いがつづられていました。けれども、屋良主席が国会にこの建議書を届けたときには、すでに政府はアメリカと密約を結んでいた後でした。この50年、最初から本土の者たちは沖縄の人たちの声を一つもきちんと聞くことをしてこなかったことを本当に申し訳なく、深く問われる思いがしました。

この暗澹たる暗闇が覆う世界を、しかし、神の憐みと恵の光で照らし続けてくださる神の言葉として、十字架の主が「事実」生きておられる！…。これが苦難の連続の伝道活動の中でパウロを支えた確信でした。私たちもこの「十字架の主」の光をリアルに受け取り、共に教会の働きに励んでいきたいのです。そして1章3節にあるように「信じて働き、愛して労し、望んで耐える」。十字架の主からいただく信仰と愛と希望を、自分の暮らしの中で生きていく者とされていきたいのです。